

---

# 猫を捨てた猫王子。～幸せの蒼い猫～

にゃんこたろう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫を捨てた猫王子。～幸せの蒼い猫～

### 【Nコード】

N1199Q

### 【作者名】

にゃんこたろう

### 【あらすじ】

人間ではない、一人の少年。そして、一人の蒼い猫。  
少年はこの蒼い猫を得るため、墮猫使となった・・・。  
これはこの墮猫使少年と、蒼い猫の物語。  
少年は翼をなくしてまで、幸せを得ることができるのか・・・。

## ブログといきさつ。(前書き)

この物語は、多少ドッキリ要素がありますので、十分にご注意くださいw

## プロローグといきさつ。

### プロローグ

「・・・なぜですかっ!?ここには・・・家族が、家が、私がいるのにつ!・・・」  
「・・・それでも・・・ここには彼女がいないから。たとえ・・・種がちがっても・・・私は・・・彼女がいいんだよ。彼女じゃなきゃダメなんだ。だからこうして・・・私は・・・禁じられた薬を使って人間になったんだ。・・・まあ、不完全だけどね。じゃあ・・・もう、いかなきゃ。また会えたら・・・そのときもお前は幼馴染だ。・・・じゃあな、ルロ。」

光の中に消えた少年。その少年は・・・もともとの姿を捨てた。そう、翼をなくした天使と変わらなかった。

墮天使となった彼は、翼をなくしてまで、何を得ようとしたのだろうか。これはこの少年と、少年が得ようとしたものの物語。

### 第一章、墮猫使（墮天使）のゆくえ

にぎやかな町を、一人さびしく歩く少女。彼氏いない暦十・・・  
六年、鈴美音<sup>すずみね</sup> 猫青<sup>みお</sup>です。

「・・・ってなんで名前に猫!?なに!?私の両親ネーミングセンスないの!?て言うか猫に青って何!?・・・（スーパードシンキングタイム。）・・・ああ!もしかしてアメリカンショートヘア?ってか私って・・・;・・・ちよー痛い人だわw・・・（苦笑）」

「  
　　というか変人だ。いくら一人だからといって、こんなごまかし方したら、よけいに痛い人だ。」

ザワザワ・・・辺りはざわめいている。人がたくさんいるせいだろ

う。・・・否、そう思いたい。

「・・・帰ろ。」

そもそも私は目的があつてここ、商店街通りに来たわけではなく、たまたま帰り道だったから通っただけなのだ。だから、どっちにする私は家に帰るわけだ。

「やだあゝシヨウくんたらっ！」「ほんとだつてゝ。」「いちやいちやキヤイキヤイ。町にはこんな（バ）カップルがあふれている。（こんなとこいたら、ますます哀しくなるだけなんだしっ！あゝもうカップルなんてクソくらえっ！）」

もうすでに逆恨みである。私はそこらへんにあつた電柱を、おもいきり蹴飛ばした。案の定、

「っ・・・いったあああああああああああ！！！！！！！

！」という声が、商店街、否、町中に響き渡った・・・。「数分後――ジンジンする足にムチ打ち、私は自宅であるアパートを目指した。

私は、「桜花荘<sup>おうかそう</sup>」というアパートに住んでいる。一人で。

「ったく・・・なゝにが『カワイイ子は自立させなきゃ！』よっ！――ぶつくさぶつくさ・・・」私の母は、自分の子供に関しては、なんでもじぶんでやらせる。兄もそうだ。

「まあ、そのおかげで将来困らないんだけどね・・・」母は、月に一度、生活費を送ってくれる。・・・ただし、一万円。

「・・・どれだけバイトとの両立厳しいとおもってんだか・・・」まあ、アパートは激安なのでいいが。激安な理由はというと・・・大家さんが動物好きで、ペットのにおいや鳴き声の問題があるからだ。

「私としては・・・ペットオーケーでいいけどネ。」動物アレルギーの人にとっては、地獄そのものだ。

「つと見えてきた見えてきた。」桜花荘には、その名のとおりに桜の木が生えている。そしてアパート自体もほのかな桃色。とても可愛らしい容姿だ。

「手紙来てるかなゝ・・・ってんん！？」「二階の左から二番目の

ドア、私の部屋の前に、見たことのない同年齢らしき男がたつていた。

「……。」私は目をこすつてみたが、その男は消えなかった。私は無言で階段を上り、男に尋ねた。

「あのう……どちら様でしょうか?」「……。」「どこかで会いましたでしょうか?ご用件は?」私がさらに続けると、男は困つたような顔をして、やっと口を開いた。「……話せば長くなるんだが……。」「……じゃあどうぞ。」私は鍵を開けると、中へ入るようにうながした。

「ああ……おじやまする。」男は入ろうとして……けつつまずいた。ズベシヤ。「ぶっ!」↑コレは私だ。男はというと、無言でゆっくりと立ち上がった。「……。」「だっ……ダイジョウブですかっ!」「心配ない。私はなんとも……。」

「なくないじゃないですかっ!鼻血でてますよ!」「ほう……これがウワサに聞く鼻血というものか……。」「とつとにかく!なかにあがってください!応急処置しますからっ!」「……すまない。」

男は微笑した。どこか哀しげな。「ぶっ!」私はその顔に、嘔きだしてしまった。「? どうした?」「い、いえ……どうぞ、こつちです。」私は苦笑いをして、男の手をひいた。「……!」「どうかしました?」「……いや……/ /なんでもない/ /」「ボタボタッ。」「あゝっ!?鼻血がつ!」「す、すまないっ!」「ニヤー。」「あつ……タイガ!ちよつと待つてねっ!」「……ヴヴ……」「フシャーッ!」「こらっ!すみません。この子、ちよつと臆病で……」「知ってる。」「?」

――数十秒後――

男は、ティッシュの山を、鼻の下に当てていた。「それで……あなたは……?」「……私は……その前に、この耳と尻尾に見覚えはないか?」「は?」そういうが早い、男は頭を振り、髪を整えた。すると、そこから……猫耳が生えていた。「……!?!」

「少し恥ずかしいのだが・・・いたしかたない。／／／」

男は顔を少し赤らめて、ズボンに手をかけた。

「え？え！？／／／」「・・・／／／」男は赤い顔のまま、ズボンを少しずつ下げていった。

「えっ！？ちょ、それ以上はあああああっ！！／／／／」「・・・／／／」「シュル・・・（・・・シュル？）」

私が恐る恐る顔を上げると、そこには・・・

「しっ・・・ぽ・・・」「・・・うむ。／／／それで・・・この毛の色や、毛並みに・・・見覚えはないか？」「・・・？」「・・・／／／／／」

私は、まじまじとソレを見つめた。

「・・・触ってもいい・・・ですか？」「っ！？／／／・・・いいが・・・その・・・尻尾は・・・弱いので・・・遠慮してくれ。／／／」

「・・・」サワサワ・・・「っ・・・／／／」「・・・？」「（この感触は・・・どこかで・・・）サワサワ・・・「っ・・・／／／・・・ゴロゴロ・・・」

男は、猫のように喉を鳴らした。そのときだった。私はハッと、思い出した。と、同時に手がとまる。

「・・・ふう／／／／／それで・・・何か・・・思い出したか？／／／」「あなたは・・・もしかして・・・」「・・・」「もしかしなくても・・・」「シンちゃん？」「・・・。」「男はそれを聞くと、少し頬を赤らめ、嬉しそうに微笑むと・・・」「ただいま。」「と、猫のように喉を鳴らした。」「ゴロゴロ・・・／／／」「・・・お帰り。シンちゃん。」「

こうして、二人は感動の再会をはたした・・・しかし、それを望まないものもいた・・・

「アノニンゲンヲ・・・ユルサナイ・・・」どこかで、地の底を這うような、低い猫の声が響いた・・・。

小さな町の隅にひっそりとたたずむ、これまた小さなアパート「桜花荘」。その二階の左から二番目の部屋のなかでは、一人の少女と、一人の少年（ただし猫耳有。）が向かい合って話していた。

「・・・で？」「『で？』？」「だから・・・なんでシンちゃんが人間に、しかも美少年になつてもどつてきてるわけ？しかも猫にとつては耳を触られるのとか尻尾見せるのとか恥ずかしいんでしょ？だったら無理しなくてもよかったじゃん。私にシンだよっていえば私信じるかもしれないじゃん。」「・・・性格上ありえないと思つて。」「うゝゝ」「それに・・・私は思い出してもらえなかったら、猫の国に帰るつもりだった。でも・・・猫青は思い出してくれただらう？とても・・・嬉しかったよ／＼／＼」

シンちゃんが赤くなる。私までこつ恥ずかしくなる。あれ？・・・じゃあ・・・「・・・シンちゃんはどうするの？」「え？」

「だつて、私思い出したじゃん。」「・・・ココに住む。」「・・・は？」「前みたいに、ココで猫青と住む。」「・・・ええっ！？ちよ、待つてよいくら猫だとはいえ、男・・・否、が女とひとつ屋根の下はよくないって！」「・・・ダメ？猫青は私と住むのはいやか？」「シンちゃんが、悲しそうに私を見つめる。（うゝっ！その体でそんな顔しないでえゝっ！（>0<）私めっちゃキョンキョンしちゃうからゝっ！思わずなんでもやつちやいたくなるからゝっまじで困るからゝっ！）」「イヤ・・・じゃないです／＼／」ぷしゅー。「・・・じゃなんで？」「なっ・・・なんでじゃなくてっ！その・・・私はっ！・・・その・・・男の人と同棲とか・・・そういうのはっ！ほらっ！ないと思うけど、シンちゃんも男・・・じゃなくてゝでしよっ！？その・・・部屋に二人つきりとかっ！」「ニヤー。「あ、ごめん、忘れてた。」にやあ・・・（泣）「と、とにかくっ！生き物はそういう状況になると、こう・・・変な下心とかっ！めばえちゃったりするわけよ！だからっ！ほらっ！シンちゃんも私みたいな人間より、カワイイ♀猫のほうがいいでしよっ！？私みたいなのを襲ったらイヤでしよっ！？」私は半ば死に物狂いで言

った。シンちゃんは、なぜかちょっと深くかんがえていた。そして――口を開いた。

「ほんとに・・・そう思う?」「・・・え?」「シンちゃんは、音もなく私を押し倒し、あつという間にはがいじめにした。

「ちよつ・・・と・・・ノノノシンちゃん・・・!?」「シンちゃん  
は私の顔に、自分の顔を近づけ、甘い声で囁いた。

「もし・・・『そうするのが目的だ』っていったら・・・?私は本  
気だ。」「っ!?!ノノノノノ」「・・・ごめん。」「そういうと、シン  
ちゃんは手をはなした。

「もう一度だけ・・・考えてくれないか?私は・・・猫青に断られ  
たら・・・もう私じゃなくなってしまうような気がする。理性を失  
い、猫青を・・・バラバラに壊してしまふような気がするんだ。・  
・」「・・・わかったよ。」「・・・ほんとか?」

「うん。」「もし・・・私が猫青を襲つても?」「・・・うん!?  
どっちにしろ襲われるの!?!」「否・・・いつしよにいて、  
自制できる自信がないんだが・・・;」「・・・ちよつと考  
えさせてください。」「ええっ!?!」「・・・ダイジョウブ!!襲  
われそうになったら全力で根性たたきなおしてあげるからっ!」「・  
・全力でそうならないことを祈る。;」

かくして・・・こうして、私とシンちゃんの・・・同棲生活が始  
まったのです。

## ブログといきさつ。(後書き)

え〜と・・・ヘタクソですが小6の作品ですので、どっぞ生ぬる  
い目で見て下さい。

なにとぞ夜露死苦。↑古いですが。w m<・w・>

m

## 墮猫使と、蒼い猫の出会い その1（前書き）

今回、猫青とシンちゃんと呼ばれる謎の猫耳（萌）美少年の出会いを書きたいと思います。ではく（・w・）>ノドゾ

## 墮猫使と、蒼い猫の出会い その1

―それは一週間前・・・―

私は学校の帰りだった。

「ったく・・・やっぱり復習しないとヤバいな・・・」

鈴美音 みお 猫青 みお 16歳、高校一年。苦手な教科：国語（特に漢字）、

社会（特に歴史）

・・・そして好きなもの：イケメン（アイドルとか以外）動物（爬虫類でもなんでもよし。）

ちよつと・・・男っぽいけど、中身はかわいいもの大好きな、現役高校生だ。ちなみに・・・モテる。（女に。）

「・・・フクザツ・・・（汗）」

彼氏いない暦16年。まあどこにでもいるかんじのキャラ。

「・・・いいもんいいもん！！大人になったらきれいになれるもん！」

ココまできたら、もうこれ以上はないと思うのだが・・・うん、私は何も気づいてないよ。

「ニヤア」ピクツ！「・・・ねこおおおおお！？（！w！）」

いつもは使わない神経を、フル活用。「むむむ・・・」「ニイ」ア・・・「ぴこーん！」「こつちからっ！？」

私は声のほうへと、迷いなくスタスタと進んでいった。そして、細い路地を左に曲がった時だった。

「ウニヤア」・・・「あつ！」そこに猫はいた。白銀の毛が、太陽の光を反射して光り輝いていた。それは月のように美しい色だった。キリリとした澄んだ空色の目は、衰弱しているにもかかわらず、力強くきらめいていた。そして・・・猫の周りには威厳に満ちたオーラが漂い、頭には小さな銀の王冠が控えめにのつていた。

「・・・ニヤア・・・」猫は力なく鳴いた。警戒することもなく、

すべてを時に任せていた。

「うわぁ・・・カッコイイ猫・・・って言ってる場合じゃない！猫君、いや猫ちゃんかな？」「ニ、ニア。」猫は抗議の声をあげた。「ごめんごめん。猫君、私の家来る？おなかすいてるっしょ。」

私がいようと、猫は私をジツとみつめた。私は猫をヒヨイと抱いたが、猫は抵抗しなかった。そして、猫は私につかまるように、私の胸に身をもたげた。（・・・かわいいな。）

私はアパートにつくと、キャットフードをあげた。猫はしげしげとそれを見つめ、思い切って口に入れた。しばらくカリカリと噛んだ後、すごい勢いで食べ始めた。

「おいしい？」「ニアオ。」猫は私をみて、ちゃんと返事をした。「そーかそーか。（^w^）・・・かわいいね／＼／＼／＼」「ニア／＼／」猫君は恥ずかしそうに頭をこすった。と、太い猫の鳴き声が聞こえた。「に、いいいいいい・・・」「こらっ！タイガ！」私が叱ると、スコティッシュフォールドという種類の、茶色のしましまの猫はサツとテーブルの下に隠れた。

彼はタイガ。ちょっと前に拾ってきた捨て猫だ。捨てられたせいか、少し臆病だった。でも、根はいいヤツだ。「・・・。」猫君はタイガをジーっと見つめていたが、すぐにまた食べた。

「ほらぁ・・・タイガも猫君をみないなさい！」「ヴヴヴ・・・」「返事は！？」「・・・にゃあ」

「よしよし。いいいいこ。」私が頭をなでると、タイガは嬉しそうに目を細めた。「・・・っと猫君じゃアレだな・・・。」私は猫君の名前を考えた。「あ！シンは？」「・・・にゃあ？」シンとよばれた猫君が、小首をかしげる。「シルバーと銀をかけてシン！・・・どう？」「・・・ニヤア／＼／」シンちゃんは気に入ったようですりスリと身を寄せてきた。

「んじゃあきまりっ！さあっ！おふろおふろ！！」「！？」「んにゃあ。」

この中で嬉しそうなのは、タイガと私だけだった。シン「・・・二  
ヤア・・・」

墮猫使と、蒼い猫の出会い その1（後書き）

第二段もやりまっせ〜（＾w＾）>v

墮猫使と、蒼い猫の出会い その2（前書き）

第二段ですwまあ、ゆるーく見てくださいますw

## 墮猫使と、蒼い猫の出会い その2

カポーン・・・

自宅の湯船に浸かっている一人の少女。そして二匹の猫。異様な光景だが、少女はそれを普通だと思っていた。

「ふいゝ・・・気持ちいいねゝ・・・」 「にやあつ。」 「・・・ニヤ、ニヤアノノノノ」 「シンちゃんは、なぜかうつむいていた。」「どうしたの?」 「ニ・・・ニヤアツ!!ノノノノ」「?」

結局何も分からないというw私はザバァーつと立ち上がった。」「。

□ っッ!?ノノノノ」「こらっ!?

なぜ暴れる!?!」「にににににやあああああつつつ!!ノノノノノノ」「グワシ。」「ンニヤツ!?!」「おちつきなさい。」「私は猫用シャンプーを手に取り、ペシヤツとシンちゃんにつけた。ゴシゴシ。」「ニヤ、ニヤアツノノノノノ」「ゴシゴシ。」「・・・ノノノノノノゴロゴロ・・・ノノノノ」「おっ?落ち着いたか。」「

タイガ「・・・フシ・・・」「ギリリ」「ッ・・・にやあ・・・」「タイガは次にやってあげるから。」「それを聞くと、タイガは目を細めた。」「

「気持ちよかったねゝ」 「んにやっ!」 「にや、・・・にやあノノノ」「ポスター出したけどみつかるかな・・・」「・・・じゃあ寝よつか!」「んにやっ!」「に!?!ノノノノ」「さあさあレッツラゴー!」

「ウニヤアアアアアアアアア!!!!!!ノノノノノノノノノノ」 その夜、私は一人と二匹で寝た。なぜかシンちゃんがタイガよりあったかい気がしたんだけど・・・気のせいかなっ!

―翌日―

ピンポーン。「はゝい。」「私はだいたいの予想はできていた。ガチャ。

「すみません、ポスターをみたのですが。」やっぱり。「ニヤアツ  
！」。「王子っ！！さがしましたよっ！！」意外と早かったな  
とか思いつつ。「よかったね。」。「にゃ！・・・にゃあ・・・」  
「うちの王子がお世話になりました！」。「あ、いえ・・・」。「にゃ  
あ・・・」王子と呼ばれたシンちゃんは  
悲しそうに私を見た。「・・・また遊びにおいでよっ！！」私が言  
うと、シンちゃんはぱあっとなつて、元気に出て行つた。「では  
」。「はい・・・」ガチャ。

．．  
そのときは、また遊びにぐればいいな〜とか思つてたが、まさか．

「まさか美少年になつてくるとはね。」。「・・・だめだった？」  
「いやダメじゃないけどさ・・・私だつて・・・緊張するわけで．  
／／／／」「ふん．．．なあ。」。「なに？」。「一緒に風呂に  
はいるう？」。「ぶっ！？／／／／」「うにやつ！？」。「ななななな  
なななななっ！？何言つて・・・っ！？」

「いいじゃないか。あの時、私が反対したのに一緒に入つたんだか  
ら・・・／／／／どうせもう見られただろう？」。「だだだだつてあ  
のときシンちゃん猫だつたんだもんっ！！」。「猫だつたからつて  
私だつてゝなんだぞ？タイガだつて。あのときとかタイガ鼻の下の  
ばしてたんだぞ？」。「うにゃあっ！？（怒）」

「いででで。次は・・・私が体、洗つてやるう。」。「っ！？けっ  
こうですううう！！／／／／／」

ぴゅー。ボタンッ！「・・・くくく。猫青はかわいいな。」。「フシ  
ヤー。」。「・・・フン。」

—そして30分後—

「・・・」「なぜコソコソしている？」「うわあっ！？／／／／」  
「・・・ぶ。」。「っ！私寝るっ！／／／

おやすみっ！！／／／」「・・・じゃあ・・・借りるぞ。」。「かつ．  
．．勝手に使つて下さいい！！／／／／」

ボタン！」「……やりすぎたかな。」

——ところ変わって猫青の部屋——

ドッキンドッキン×∞

「うあゝ……ドキドキしたあゝっ！！／／」でも……もしかして……そー言うことなのですか？神様。「もしかして……チャンスってコト？／／／／／」——30分経過——

「……寝れない……／／／／あゝっ！！シンちゃんのせいだあゝっ！！……／／／／」ガチャ。（！？）「すー。すー。（寝たふり）」「……。」「すー。すー。（……）」「……。」

「すー！すー！（……）」「モゾモゾ。」□　　ゝっ！？」「あ。おきてたのか。」「なにさりげなくベッドに潜りこんでんのよおおおおおっ！！？？／／／／／」「いや……居間で寝ようとしたら……背中痛くなった。それに寒い。」「……って何で裸なのおおおおおおおっ！！？？／／／／／／／」

自重しろおおおおお！！／／／／／」「だって服アレしかないもん。」「えええええええ！？／／／／／／」

「それにこれが自然体……」「バッキーン！！（殴）」「ぐほおっ！？すみませんすみません嘘ですから許してくれ……」「よろしい／／／さつさと服着なさいっ！！」「はいっ！」「ぴゅー。」「……じゃあ洗濯機回すか。」「私はベッドから下り、洗面所へと向かった。

「……／／／／／」そこには、男物の服があった。しかもキレーに山積みで、一番上にパンツが……

「……ベタな展開に負けるかっ……！！うりゃっ！」「私は掛け声とともに、サツとすばやく洗濯機に服をいれ、サツとふたを閉めた。そして一気にボタンを早押しし、見事に30秒で洗濯機を回した。

「ふいゝ。」「私は汗をぬぐうと、自分の部屋に戻った。

部屋につくと、もうすでにシンちゃんが寝ていた。」「……／／／シンちゃん（人間バージョン）はめちやくちゃキレーな顔をしていた。」「……寝よ。／／／」私の胸から沸き起こった感情を押さえ

込み、私は深い眠りにおちた。「おやすみ・・・」

## 墮猫使と、蒼い猫の出会い その2（後書き）

おほほほほ！ベタがご馳走ですwさあ次の回は・・・どーなるんでしょうねえ・・・ムフフフ・・・では！乞うご期待！< > w  
< > ノ

目覚まし・・・？（前書き）

今回、ちょっと過激です。wではござ。

目覚まし・・・？

チュンチュン……朝日がとあるアパートの、とある部屋に差し込む。カチ、カチ、カキッ！……！ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ——ガンッ！「んん……むにゃむにゃ……もう食べれないって……／＼w／＼」……。「でももう一口だけ……」……。「猫青……起きて……？」……。「んあ……あと五分……」……。「にゃあ……？」……。「……大丈夫だ。任せる。」ギシ……。「……？」「ペロペロ……」「う……にゃっ！？」（怒）「……タイガ……？」「うにゃうにゃう……！（違う違う……）」「……他の猫の名前を呼ぶか……」  
・お目覚めの時間でございますよ。眠り姫殿。「チュウ。

「シャアアアアア！！\w/」 「んっ・・・！？ん？！？」

「バッキーン!! 吐血↓>(。。(、)「ゼイ、ゼイ・・・死ぬとこだったんじゃ!!」「・・・それはすまなかつた。」「しかも・・・」「ファーストとられたああああああ!!!!!!!!!!」(人間)「・・・いいじゃないか猫のとき朝起こしただらう。」「どうわくかあゝらあゝゝゝゝゝ!!!!!!!!!! あんた今人間でしょおおおおおお!!!!!!!!!!」

おはようございます。目覚めスツキリ、鈴木美音 猫青です。．．．  
 こんなのいたら、身が持ちません．．．（――Ａ――）

「せつかく起こしたのに。」「・・・あつ！ちよつと部屋でて！」「え？な・・・」「なんでもつ！！」パタン。ガチャ。

「……いま思えば最初から力ギ閉めればよかったんだよね……」

;

あいかわらず、バカですw

私はさっさとパジャマを脱ぎすて、制服に着替えた。

「はあ……」 「ふむ。」  
「……………」 ○ □  
「！？」 「……………？ど

うした？」「……なんつで……」「？」「なんであんたがココ  
にいのよおおおおおおお！！？？／／／／／／バ  
ッキーン……（殴）「ごふうっ！？ただ単に力ギあけたらあいたつ  
てだけだ……」「どーやってあけんのよ変態シンちゃん！！！！  
／／／／／」「へんっ……！？いや爪を使つてだな……」「そ  
んなことどーでもいいわい……」「ええっ！？」「逝つてこ……  
ゝゝい！！！！／／／／／」「りっ……理不尽だあああああ  
ああ！！！！……」「そしてシンちゃんは星になった。「うな  
あう……（ご愁傷様……）」

目覚まし・・・？（後書き）

一回書いて見たかったんですよね〜wそしてホニャララは星になっ  
たって・・・w

登校！！ついてくんなっ！！（怒）／／／／（前書き）

サブタイトル通りです。

登校！！ついてくんなっ！！（怒）／／／

ムッス。 （怒）「……なあみ……」「うるさい。」「しゅん……」

「うにゃ。（いい気味だ。）」

一人と二匹（？）の食卓。無言。私はめちやくちゃ怒っている。そう、怒っているのだ。

そしてタイガは機嫌がいい。なんでもかは知らないが。もぐもぐ・

「……なあ。」「何？（怒）」「私は何を……」「……」にトーストあるじゃん。」

半ば怒り気味に言っと、シンちゃんは困った顔をした。

「しかし……キャットフードじゃダメなのか？」

「はあ？その体でキャットフードなんて食べたらお腹壊すよ！？」

「……きょうん……」

あ。耳が下がった。ついでに尻尾も。「言っとくけど、お腹壊しても医者に行くお金ないからね。」

「……びんぼー？」「そ。びんぼ……って人ん家のコト勝手に言うなっ！！」「すまん。」

シンちゃんは素直に謝り、恐る恐るトーストを口にした。あの日のように。

「……うまい。」「でしょ。」「そして私は最後の一口を口に押し込み、立ち上がった。

そしてシンちゃんも立った。「シンちゃんは来ないでね。」「……なぜ？」「なぜって……」

それはもちろん、シンちゃんが来たら女子共に騒がれるのは目に見えている。「……わかった。」

シンちゃんはそういうと、改めて座った。

そして私は、学校へと向かった。

「・・・なあタイガ。」「・・・うにゃ?」「そろそろ正体を現してもいいんじゃないか?」

「・・・んにゃ?(なんのことだ?)」「・・・いや・・・なんでもない。」

「・・・んなあゝ。(それより、猫青<sup>みお</sup>を追わなくていいのか?)」「なんで?」

「・・・んにゃあゝうにゃあ。(ああ見えてもアイツ、好かれてるんだぞ?)」「・・・。」

「にゃ・・・(今頃、彼氏とキ・・・)」「出かけてくる。くれぐれも、猫青には言つなよ?」

ガチャ。「・・・承知。」

つつばしる。つつばしる。つつばしる。

そして校門到着。一応後ろを振り返るが、シンちゃんはいない。

ホツとするのもつかの間、後ろから飛びつかれた。

「ぬわゝに後ろを振り返っちゃってんのかな?」「一匹オオカミちゃん」ともあるうお方が!!」

「・・・やめてよそのネーミング。」

飛びついてきたのは私の親友、零山<sup>ぜろやま</sup> 霧雫<sup>むつな</sup>。変わった名前の女の子。

みんなには「むうちゃん」と言われている。私と同様、活発な女の子。そのため気が合う。

「さあゝては好きな人ができたなあゝ?ニヤニヤ」ぼん。頭の中でシンちゃんの画像が出る。

「ちつつちがつ!!そんなんじゃないっ!!////」

私はあわてて頭の上をポフポフする。

「どこの少女マンガだお前は。」「あつ。><」ツツコミが鋭い。

「隠してもムダムダゝ!!みいちゃん顔が変わったものゝ^^」「!?」(顔って変わるの!?)

私があわてて顔を触るのを見て、むうちゃんはニヤリとした。「

「やっぱりねえ。」ハツ・・・  
「もしや・・・」

「だましたなこんにやるおー！」右ストレートをあっさりかわされる。さすがむうちゃん。

「あいかわらず扱いやすいなあーみいちゃんは。」「もうどーでも！」キーンコーン・・・

「「あ。」」二人で口をあける。そして校舎まで競争。これが私の日常。

「ふんふん。・・・こつちか。」「きゃんきゃん！」「ん？」「すみませーんうちの犬が・・・」

「あ、こちらこそ。」「キャンキャン！」「・・・フシャア。」ビクウツ！「クーンクンクン」

「・・・フン。」

遅刻の少女が二人と、それを追う一匹(?)の少年。果たして少年は追いつけるのか!?

乞うご期待!!

登校!!ついてくんな!!!(怒)/// (後書き)

その2に続きます!

登校！！ついてくんなっ！！（怒）／／／／その２（前書き）

登校！！ついてくんなっ！！（怒）／／／／ その2

私はむうちゃんと遅刻ギリギリで登校。これも日常。

「平和だねえ／＼．．．」 「そーだね。」 「なんかおもしろいことないかな／＼．．．」 チロツ

（むーv・） ↓ （．．．み）

「な、なんでこつちみんなの！？／／／／／」 「ん／＼べつにい／＼．．．もしも青猫<sup>みお</sup>が話してくれるならすんごい助かるなあ／＼って．．．」 「だあ／＼かあ／＼らあ／＼！！！！！！違うつつてんでしょお！？」

必死で否定するが、むうちゃんは「どーだかwww」といつてニヤヤするだけだった。案の定、先生に「こらそこー。うるさいぞー」と言われてしまった。

それでもこりずに、むうちゃんは「はあ／＼．．．退屈だなあ．．．猫耳のイケメンでも歩いてこないかなあ／＼．．．」 とつぶやいていた。（どこまで知ってんの！？／／／／／）

どうやら知らないらしいが、ドキツとした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1199q/>

---

猫を捨てた猫王子。～幸せの蒼い猫～

2011年3月19日13時56分発行